

止観の研究

—— 初期經典から註釈文献へ及び現代タイ仏教の実践法 ——

K. PHRAPONGSAK

I. はじめに

本論文『止観の研究 — 初期經典から註釈文献へ及び現代タイ仏教の実践法 —』（A 4 判243ページ）は、初期から註釈文献期に至る各時代の南北両伝の仏教文献を順に検討して、止観の定義と止観による瞑想実践法の歴史的展開を明らかにすると同時に、タイ上座仏教で現在行なわれている瞑想実践法と比較研究したものである。その内容を目次によって示すと、以下の通りである。

目 次

序論	1
第1章 阿含・ <i>Nikāya</i> における止観	8
第1節 止観の成立と展開	8
第1項 <i>Khuddakanikāya</i> の古層の韻文經典に説かれる止観	9
第2項 阿含・ <i>Nikāya</i> の散文經典に説かれる止観	14
第2節 止観の定義	23
第3節 止観の修習次第の問題	27
第1項 止観と八聖道	28
第2項 止観と心解脱・慧解脱	40
第1章の結び	62
第2章 南伝上座部文献における止観	65
第1節 止観の定義と展開	66
第1項 經と論との中間時代に見られる止観の定義	66
第2項 <i>Abhidhamma</i> （論）時代に見られる止観の定義	69
第3項 論と註釈文献との中間時代に見られる止観の定義	71
第4項 註釈文献時代に見られる止観の定義	72
第2節 止観の修習次第の問題と展開	73

第1項 経と論との中間時代に見られる止観の修習次第	73
第2項 <i>Abhidhamma</i> (論) 時代に見られる止観の修習次第	81
第3項 論と註釈文献との中間時代に見られる止観の修習次第	83
第4項 註釈文献時代に見られる止観の修習次第	88
第2章の結び	102
第3章 北伝部派文献における止観	106
第1節 止観の定義と展開	106
第1項 説一切有部に見られる止観の定義	106
第2項 北伝他部派に見られる止観の定義	109
第2節 止観の修習次第の問題と展開	113
第1項 説一切有部に見られる止観の修習次第	113
第2項 北伝他部派に見られる止観の修習次第	140
第3章の結び	150
第4章 現代タイ仏教における止観	154
第1節 現代タイ仏教における止観の展開	154
第2節 マハーターツ寺院系の止観の実践法	156
第1項 沿革	156
第2項 止観の実践法	159
第3項 止観の観点	164
第3節 東北地方寺院系の止観の実践法	166
第1項 沿革	166
第2項 止観の実践法	169
第3項 止観の観点	174
第4節 バクナム寺院系の止観の実践法	176
第1項 沿革	176
第2項 止観の実践法	178
第3項 止観の観点	180
第4章の結び	182
結論	187
略号およびテキスト	i
参考文献	v
【附録1】タイ上座仏教の歴史	xxiii
【附録2】現代タイ仏教における止観の実践法【図解】	xxx
あとがき	xlv

II. 論文の要旨

序 論

仏教の修行道論に関しては、多くの研究がなされてきたが、主として二つの傾向が見られる。^①「四念処・七覚支・八聖道」などを中心とする「三十七菩提分法」を研究したものと、瞑想法の中心概念である「定 (samādhi)・慧 (prajñā / paññā)」あるいは「止 (samatha / samatha)・観 (vipaśyanā / vipassanā)」を中心^②に研究したものとである。しかし、現代上座仏教では止観^③を修行する方が普通であるから、本論文は、止観を中心的な研究テーマとしている。

従来の止観の研究は、5世紀の Buddhaghosa の *Visuddhimagga* (清浄道論) などの体系的な記述に基づいて「止を行ずる者 (samathayānika)」と「観を行ずる者 (vipassanāyānika)」という二種の行者を研究したものが多い。初期経典 (阿含・Nikāya) における止観の定義と修習次第を研究することが、本論文第1章の目的である。

次に、南伝上座部における経と論の中間時代 (紀元前250-200年頃)、*Abhidhamma* (論) 時代 (紀元前250-100年頃)、論と註釈文献の中間時代 (紀元前100-後100年頃)、そして註釈文献時代^④ (100-500年頃) の諸文献における止観の定義と修習次第を順に検討して、止観の思想的展開を見出すことが、本論文第2章の目的である。

次に、北伝諸部派に属する文献、説一切有部の六足・発智論 (紀元前2-3世紀-紀元前後)、『大毘婆沙論』(2-3世紀頃)、世親の『俱舍論』(4-5世紀頃)と衆賢の『順正理論』(5世紀後半)、さらに所属部派・成立年代不明の僧伽羅刹の『修行道地經』、訶梨跋摩の『成実論』(250-350年頃)に見られる止観の定義と修習次第を順に検討して、南伝上座部仏教の伝承と比較するのが、本論文第3章の目的である。

最後に、現代タイ上座仏教において止観の実践法がどのように伝わっているかをマハーターツ寺院系^⑤、東北地方寺院系^⑥、パクナム寺院系^⑦の瞑想指導寺院を現地調査することにより把握し、止観の実践法がどの文献に基づいてどのように実践されているかを解明するのが、本論文第4章の目的である。

第1章 阿含・Nikāya における止観

阿含・Nikāya において止観の定義と修習次第が詳細に説かれることはない。したがって、主として「止観」と「八聖道 (aṭṭhaṅgika-magga)」及び「心解脱 (cetovimutti)・慧解脱 (paññāvimutti)」の用例を調査して、以下の結論に到達している。

1. 「止」は「定」すなわち「増上心 (adhicitta)」に相当し、「観」は定と不離の関係にある

「慧」すなわち「増上慧 (adhipañña)」に相当する。

2. *Khuddakanikāya* の古層に属する韻文經典では、「止観 (samatha・vipassanā)」と併記されることはなく、「止」は samatha と cetosamatha (心寂止) が独立して現れ、「観」は名詞形ではなく、動詞形でのみ現れる。「止」のみを修習すれば解脱できるというのではなく、「止」は解脱に不可欠な条件である。

3. 阿含・*Nikāya* の段階で既に「止」と「観」両方を修習していたことを明らかになった。後代のように、ただ「観」のみを修習する「純観行者 (suddhaviṇṇaṇāyānika)」または「乾観者 (sukkhaviṇṇaṇa)」は見出されない。一見「観」のみを修習するように思われる「慧解脱者 (paññāvimutta)」も「四禅」の段階で「止」を修習しなければならない。



第2章 南伝上座部文献における止観

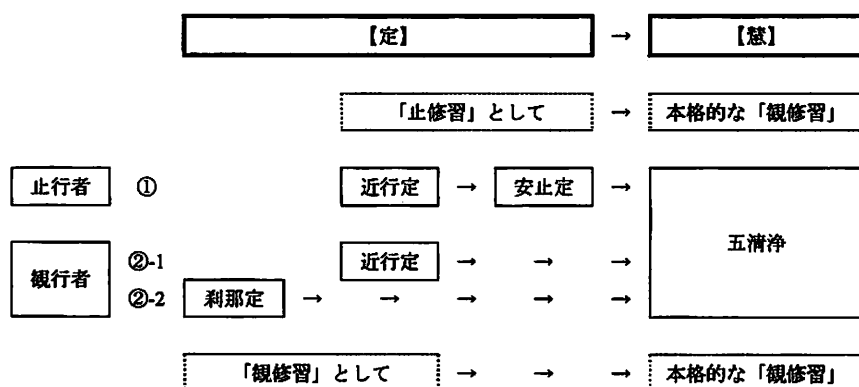
経と論の中間時代から註釈文献時代まで各時代の文献において、止観の定義と修習次第を明らかにし、以下の結論に到達している。

1. 経と論の中間時代に成立した *Paṭisambhidāmagga* ではじめて止観が明確に定義された。この定義は、後代パーリ文献においても本質的に変わらない。つまり「止」は「定」、「観」は「慧」と定義される。

2. *Paṭisambhidāmagga* は、止観の修習次第に関して、*Nikāya* では詳しく説かれない四つの修習を詳細に説明するが、要するに「止の後に観を修習する」もの (止→観) と「観の後に

止を修習する」もの（観→止）とに分けられる。この両者は、註釈文献時代まで一貫して、平等で差別のない修習であると説かれる。

3. 註釈文献においては「観」のみを修習することを強調する「観行者」「純観行者」「乾観者」という新しい術語が現れる。一見かれらは「止」あるいは「定」に全く関係しないようであるが、実際は「刹那定 (khaṇikasamādhī)」か「近行定 (upacārasamādhī)」かに至るが、「禪 (jhāna)」に至る「安止定 (appanāsamādhī)」に至らない者のことである。一方「止行者」は「安止定」に至る者である。



第3章 北伝部派文献における止観

北伝部派仏教の文献に関して同様の調査を行い、以下の結論に到達している。

1. 止観の定義に関しては、北伝でも同様に「止」は「定」、「観」は「慧」と説明される。この点から見れば、止観の両伝承には相違がないと思われるが、両者の修習次第には若干の違いが見られる。

2. 説一切有部の修習次第においては「未至定 (anāgamyasamādhī)」「静慮中間 (dhyānāntara)」「近分定 (sāmantakasamādhī)」という独自の術語が見られるが、南伝上座部の修習法と対応関係が見出される。つまり「近分定」は「四禪・四無色定」の一々の前段階であり、上座部註釈文献における「近行定」に相当する。「静慮中間」は、初禪と第二禪との中間であり、上座部の論 (Abhidhamma) における「五禪」の「第二禪」に相当する。「未至定」は「初禪」の「近分定」である。ここで注目されるのは、上座部註釈文献に現れる「刹那定」である。有部をはじめとする北伝他部派には、関連する術語が見られないため、これは上座部独自の考えであることが分かる。

3. 有部においても「止行者 (samathacarita)」と「観行者 (vipaśyanācarita)」という二種の行者が存在する。「止行者」は「四禪」のみならず「無色定」にまで至る者であるが、「観行

者」は「四禪」に至る者である。両者は、上座部の「止行者」と「観行者」に対応するが、内容はかなり異なる。有部の「止行者」は「四禪」を超越し「無色定」に至るが、上座部の「止行者」が至るのは「四禪」でも充分である。一方、有部の「観行者」は「四禪」に至る者であるが、上座部の「観行者」は「四禪」に至らない者である。したがって、有部の「止行者」と「観行者」は、ともに「四禪」に到達しなければならないので、かれらの修習次第は「禪・慧」の両者が並び修習される仏教本来の修行法に近いと考えられる。

4. 有部の『俱舍論』にのみ「止」の修習として「不浄観 (aśubha)」と「出入息念 (ānāpānasmṛti)」が、有漏の「観」の修習として「四念処 (smṛtyupasthāna)」があげられる。前者は、南伝上座部の「三十八業処」あるいは「四十業処」^⑧に、後者は「四界差別 (catudhātu-vavatthāna)」に相当する。

5. 所属部派不明の『修行道地經』においては、「止の後に観を修習する」にせよ「観の後に止を修習する」にせよ解脱することができると説いている。具体的な方法としては、「止の後に観を修習する」方法のみを論じて『俱舍論』と同様に「不浄観」と「出入息念」による「止」の修習を薦めている。しかし、ここで注目されるのは、本經において「止」は「四禪」に至っても、至らなくても評価されるが、「四禪・五神通」にとどまっている行者は「仏弟子・禪」ではなく、ただ「凡夫禪」であると批判されていることである。一方「初禪」に先行する、上座部の「剎那定」や「近行定」、有部の「未至定」や「近分定」に相当するものは見られない。

6. 多聞部もしくは経量部に帰せられる『成実論』は、止観をすべての修道の根幹であると重視している。さらに、阿含を引用し、詳細に止観を説明し、解釈している。特に「三十七菩提分法」と「止観」の区別が示され、「止の後に行なう観」と「観の後に行なう止」の修習の違いが解釈されている。これが『成実論』の止観の特徴である。

第4章 現代タイ仏教における止観

現代のタイ上座仏教において、どのような瞑想法が実践されているのかを調査して、それがどのような古典文献に基づいているのかを検討した結果、以下の結論に到達している。

1. マハーターツ寺院系では、*Nikāya*の*Mahāsatipaṭṭhāna-suttanta*に基づいて、四念処を指導しているが、後代の註釈文献の解釈と同様に「安止定」や「近行定」に至らない「剎那定」によって修習する「観行者」の瞑想法であることが判明した。ここで注目されるのは、この瞑想法が「四念処」を重視して「ウィパッサナー (観) 瞑想」と呼ばれることである。この呼称は、伝統的な南伝上座部にはなくて、北伝有部の『俱舍論』に見出される。この観点からすると、ビルマ仏教の影響を受けているマハーターツ寺院系の瞑想法は、南伝上座部だけでな

く北伝有部の伝統も受け入れたと考えられる。

2. 東北地方寺院系では、止観が密接に関係しているが、順序を示せば、「止」によって心を落ち着かせた後に、物事をありのままに「無常・苦・無我」と観察する。つまり「止の後に観を修習する」瞑想修行を行なっている。したがって、この瞑想法は「四禅」に至る「安止定」を修習した後に「観」を修習する「止行者」の瞑想法であることが明らかになった。

3. パクナム寺院系では、まず心を落ち着かせる「止」を修習し「四禅・四無色定」に至らなければならない。その後「観」の修習により十結・煩惱を捨断し、預流・一來・不還・阿羅漢という四沙門果に順に到達するのである。したがって、パクナム寺院系の瞑想法は、止観両方を重視している。これは「止行者」の修行法であり、初期經典に見られるように「禅・慧」の両者が並び修習される仏教本来の修行法であることが明らかになった。

	【マハーターツ寺院系】	【東北地方寺院系】	【パクナム寺院系】
【基本文献】	<i>Mahāsatipatthāna-suttanta</i>	<i>Ānāpānasati-sutta</i>	<i>Bāla-vagga</i> 10
【解釈文献】	<i>Mahāsatipatthāna-suttanta</i>	<i>Visuddhimagga</i>	<i>Visuddhimagga</i>
【実践法】	四念処	出入息念+仏随念	光明遍+仏随念
【行者】	観行者	止行者	止行者

III. 研究の課題と今後の展望

本論文では、初期經典から註釈文献に至る各時代の南北両伝の仏教文献を順に検討する作業を通じて、止観の定義と修習次第の展開を明らかにし、タイ上座仏教で現在行なわれている瞑想実践法と比較研究することを試みた。

説一切有部をはじめとする北伝部派仏教の文献を調査して、南伝上座部仏教の瞑想法との一致点と差異点を明らかにした。また、文献研究の成果と照らし合わせることにより、現代タイの上座仏教において実際に行なわれている瞑想法がそれぞれ少しずつ異なる仏教文献に基づいていることが判明した。インド仏教の実践的伝統がタイ仏教に現在も生きていることが実証されたことになる。ただし、なぜこのような複数の異なる伝統がタイ仏教に実在するのか、その理由を考究するのが今後の課題である。

また、止観の実践は、南北両部派仏教の文献だけでなく、大乘仏教文献にも論じられている。特に、修行道論を中心テーマとするのは瑜伽行唯識学派の『瑜伽師地論』である。これら複数の仏教瞑想法の伝統を歴史的に比較対照することにより、ヨーガをはじめとする汎インド的な瞑想法も考慮して、仏教における瞑想法の発展の歴史を跡付けることは、本論文の研究成果の上に立った今後の課題である。

参考文献

- 宇井伯寿 [1926] 「八聖道の原義及びその変遷」『印度哲学研究』3, 東京: 甲子社書房, pp.3-61.
- 金宰晟 [1995] 「『清浄道論』における刹那定と近行定 — Samathayāna と Vipassanāyāna の接点 —」『インド哲学仏教学研究』3, 東京: 東京大学文学部インド哲学仏教学研究室, pp.3-16.
- 田中教照 [1993] 『初期仏教の修行道論』東京: 山喜房仏書林.
- 早島鏡正 [1975a] 「仏教真理観の内相と外相 — パーリ仏教を中心として —」『仏教における法の研究』東京: 春秋社, pp.77-96.
- [1975b] 「初期仏教における定と慧」『日本仏教学会年報』41, 東京: 日本仏教学会西部事務所, pp.21-33.
- 水野弘元 [1964] 『パーリ仏教を中心とした仏教の心識論』東京: 山喜房仏書林.
- 森章司 [1979] 「南方上座部の行道論」『東洋学論叢 (東洋大学文学部紀要第32集) 仏教学科中国哲学文学科篇 IV』東京: 東洋大学文学部, pp.71-124.
- [1980] 「部派仏教の修行道論」『日本仏教学会年報』45, 京都: 日本仏教学会西部事務所, pp.19-37.
- Cousins, Lance S. [1984] "Samatha-yāna and Vipassanā-yāna," *Buddhist studies in Honour of Hammalava Saddhātissa*, Nugegoda: University of Jayewardenepura, pp.56-68.
- [1996] "The Origins of Insight Meditation," *The Buddhist Forum IV*, ed. By Tadeusz Skorupski, New Delhi: Heritage Publishers, pp.35-58.
- Gethin, R. M. L. [1992] *The Buddhist Path to Awakening: A Study of the Bodhi-Pakkhiyā Dhammā*, Leiden: E. J. Brill.
- Griffiths, P. [1981] "Concentration or Insight: The problematic of Theravāda Buddhist Meditation Theory," *The Journal of the American Academy of Religion* 49/4, pp.606-624.
- Phrapongsak, K. [2007] 「*Nikāya* における止観の研究」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』29, 京都: 龍谷大学大学院文学研究科紀要編集委員会, pp.80-98.
- [2009a] 「阿含・*Nikāya* における止観の成立と展開」『印度学仏教学研究』57-2, 東京: 日本印度学仏教学会, pp.903-900.
- [2009b] 「後代パーリ文献における止観」『仏教学研究』65, 京都: 龍谷仏教学会, pp.51-77.
- [2009c] 「〈止行者・観行者〉と〈定〉について」『パーリ学仏教文化学』23, 名古屋: パーリ学仏教文化学会, pp.5-20.
- [2010a] 「現代タイ仏教における止観の実践法」『パーリ学仏教文化学』24, 名古屋: パーリ学仏教文化学会, pp.69-91.
- [2010b] 「説一切有部文献における止観」『印度学仏教学研究』59-1, 東京: 日本印度学仏教学会, pp.381-378.
- [2011] 「北伝部派文献における止観」『仏教学研究』67, 京都: 龍谷仏教学会, pp.1-29.
- Schmithausen, L. [1981] "On Some Aspects of Descriptions or Theories of 'Liberating Insight' and 'Enlightenment' in Early Buddhism," *Studien zum Jainis-*

mus und Buddhismus, Wiesbaden: Steiner-Verlag-Wiesbaden-GmbH, pp.199-250.

- Thanavuddho, B. [1996a] 「ニカーヤにおける八聖道と十無学法」『印度学仏教学研究』44-2, 東京: 日本印度学仏教学会, pp.878-876.
 [1996b] 「ニカーヤにおける八聖道と三学系統の修行道」『インド哲学仏教学研究』4, 東京: 東京大学文学部インド哲学仏教学研究室, pp.3-15.
 [1998] 「ニカーヤにおける修行道の相互関係 一四念処と七覚支および八聖道との比較研究」『インド哲学仏教学研究』4, 東京: 東京大学文学部インド哲学仏教学研究室, pp.3-17.

註

- ① 金宰晟 [1995: 3] 参照。
- ② 四念処・七覚支・八聖道などを中心とする「三十七菩提分法」の研究としては、宇井伯寿 [1926]、Gethin [1992]、田中教照 [1993: 111-168]、Thanavuddho [1996a] [1996b] [1998] などが挙げられる。
- ③ 修行道の二体系である「定・慧」あるいは「止・観」を中心とする研究は、早島鏡正 [1975a] [1975b]、森章司 [1979] [1980]、Griffiths [1981]、Schmithausen [1981]、Cousins [1984] [1996]、金宰晟 [1995] などが挙げられる。
- ④ 本論文は、水野弘元 [1964: 17-40] に従って、経と論の中間時代から註釈文献期に至る各時代の文献を区別する。
- ⑤ マハーターツ寺院系の瞑想法の沿革は、当時タイ仏教に瞑想実践カリキュラムなどの根付いた修行法がなかったため、当時のマハーターツ寺院において大長老であったソムデットプラブタージャー (Somdej Phra Budhajahn (Āsabha Mahāthera); 1903-1989年) が名のある瞑想指導者を招き、マハーターツ寺院内のみで瞑想指導を行っており、出家修行者や在家信者など多数の人々が瞑想を学びに訪れていた。その後、1952年ソムデットプラブタージャーはプラタンマティーラートマハームニー (Phra Dhamma Thiraraj Mahamuni (Chodok Nāpasiddhi); 1918-1988年) を1年間ビルマへ派遣し、サーサーナイトサー瞑想指導所のソーバナ大長老であるマハーシー・サヤドー (Mahasi Sayadaw) のもとで修行させた。2名のビルマ僧侶と共にタイへ帰国したプラタンマティーラートマハームニーは1953年、「ウィパッサナー瞑想センター」を設立した。1955年、ソムデットプラブタージャーがタイ僧伽のウィパッサナー瞑想部を設立することを大長老会にて提案し、プラタンマティーラートマハームニーを指導先生として任命した。このようにしてウィパッサナー瞑想はタイに根をはり、国内外へと大きく広がっていった。
- ⑥ 東北地方寺院系の瞑想法の代表としては、ブラアージャー・マン・プーリタットー (Phra Ajahn Mun Bhūridatto; 1870-1949年) の瞑想法である。ブラアージャー・マン時代は、特に頭陀行と共に瞑想修行が東北地方のみならず全国で盛んに行われるようになり、その教えは今日まで引き継がれている。ブラアージャー・マンは、ウボンラーチャターニー県に誕生し、22歳になった時、ウボンラーチャターニー県にあるリアップ寺院にて出家得度した。その後、ブラアージャー・サオ・ガンタシーロー (Phra Ajahn Sao Kantasilo; 1859-1941年) から瞑想指導を受けた。ブラアージャー・マンは「出入息念」と共に「ブットー (buddho 仏)」と念じる瞑想をしながら頭陀行を修行していた。このようにして、各地を歩いて瞑想を行っていたため、弟子が東北地方にたくさんでき、その弟子たちがブラアージャー・マンから習った瞑想法を広めることとなった。ブラアージャー・マンの指導する瞑想法は、亡くなられてから50年を経て

も多くの人から支持されている。ブラアージャーン・マンの弟子であったブラボーティヤーナテラ (Phra Bodhiñāṇa Thera (Chah Subhaddo); 1918-1992年) に意思が引き継がれ、方々へと瞑想法が伝えられた。そして、またブラアージャーン・チャーの意思を受け継ぐ弟子たちにより、さらなる広がりを見せている。現在、ブラアージャーン・チャーの弟子により建立された別院は国内に110ヶ所、海外に10ヶ所にのぼる。

- ⑦ パクナム寺院系の瞑想法は、プラモンコンテープムニー (Phra Monkol Thepmuni (Sod Candasaro); 1884-1959年) により広められた。プラモンコンテープムニーは、スパンブリー県に生まれた。22歳でソーンビーノーン寺院で出家得度し、毎日、学問的仏教学と同時に瞑想実践に励んだ。複数の名のある僧侶から瞑想指導を受けていたが、なかなか悟りを開くことが出来なかった。それから11年後、ノンタブリー県にあるボーボン寺院で修行に入っていたある日の朝、托鉢に出る前に「出家して11年、毎日休むことなく学問も実践も励んできたのに、私はまだ仏陀や阿羅漢と同様の悟りを開くことが出来ない。これは、更なる努力をしなければならない。そうでなければ放逸な生活をする者になってしまう」と思って托鉢に出かけ、寺院へ戻ってくると、昼食の時間まで本堂で瞑想をしていた。同日の夕方、「今日、もし悟りを開くことが出来ないのであれば、自分の命を仏陀に捧げましょう。このために命を落とすこととなっても、これが後輩達の手本となるのであればそれでも構わない」と決意をし、瞑想に入り「サンマー・アラハン (sammā araham)」と心の中で静かに唱え続けた。時間を追うごとに心は徐々に静けさに包まれていった。そして、日が変わる頃、ついに悟りを開くことが出来たのであった。その後、1918年にパクナム寺院の住職となり、光明遍と仏随念を交えた「止」の瞑想法を瞑想初心者に教えていた。これに並行して、より深い瞑想に入る「観」の瞑想法を熟練者に教え続けた。
- ⑧ 森祖道 [1982: 127-128] によれば、「業処 (kammaṭṭhāna)」とは、禪定における心統一の対象として、原始仏教以来用いられて来た種々なる項目をまとめたものであって、北伝の部派文献や大乘の経論にはほとんど何も述べられていないが、パーリ仏教においてのみ大いに発達した実践教理の一つである。ただし、阿含・Nikāya における kammaṭṭhāna の語義は、何らかの「仕事」や世俗の「職業」を意味するものであって、後世用いられるようになった仏教の専門術語としての「業処」という意味は未だ存しないが、このことは原始仏教時代にこのような業処の実修がなされていなかったということの意味するものでは決してない。ただ、Vimuttimaggā の三十八業処あるいは Visuddhimaggā の四十業処の項目は実質的には既に三蔵の各所に散説されているのであって、それらが未だ「業処」とは呼ばれなかったというだけのことである。この kammaṭṭhāna が禪定における心統一の対象手段としての「業処」の意味に用いられる用例は註釈文献 (Aṭṭhakathā) においてである。